
1442

椎名もと

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1442

【Zコード】

Z6679D

【作者名】

椎名もと

【あらすじ】

無駄に好奇心旺盛なマチコは時を超える機械、所謂「タイムマシン」が完成されたという某有名学者の研究室に乗り込む。いい具合に侵入しマシンが置いてある一室までたどり着いたのだが・・・

・

「何処だ。」

「何処だ」

と言つた先に見えたのは城をバックにした銀髪とちゅんまげだった。ここが何処なのが理解できるまで少し時間がかかった。

・・・あの時もう少し落ち着けばよかつたなあ・・・・・

やはり帰らなければ、と思って振り向けばこの世の物とは思えない速さで次元空間が逃げていいくのが見えた。笑顔が凍りついた。帰れなくなってしまったのだ。

吸い込まれることを期待して、空間があつた場所に石を投げてみる。

石はストンと乾いた地面に落ち転がつていった。

数時間前。

中学生のミチ・マチコ（ありきたり）は某有名学者の研究室に忍び込んでいた。

朝の新聞にこの某有名学者が時を移動できる機械、所謂「タイムマシン」を完成させたと発表したからである。父親と母親が共に科学者のマチコは世の中のメディアより先にこの情報を入手していた。無駄に好奇心旺盛なマチコは研究所に（一人で）忍び込む計画を練つた。一般人が体験する前に自分が体験してしまおつと考えたらしい。

マチコは頭がよかつた為に計画が上手く行つた様で、忍び込むところまではすんなり成功した。問題はその先である。

研究室の防犯システムが作動してしまつたのだ。忍び込んだのは夜中だつたからか、昼よりもシステムが強化されていたからだつた。

「やばい」

と思ってからではもう遅かつた。警視庁が近かつた所為で数分後には我先にと大量の警察官が建物の中に入ってきたのである。

そこで一つ、ミチコは思いつく。

ソウダ、別ノ時代へ飛ンディッシュテシマへ。

急いでスイッチを入れる。そばにあるマニコアル等は無いも同然、触れもせず、何処にいくかわからないままにキーを打ち込む。

「飛んで行け！」

叫んだ瞬間に体が浮き上がったかと思うと急に眩暈がしそのまま失神してしまった。

田を開けてみれば見たことも無い草原と、大きな城。ふらつく足をしつかり立たせつぶやいた。

「何処だ。」と。

「他でもねえ、山城の国だ。」

不可解な金属音が城付近で聞こえたのを畠山義就よしなりと政長まさながは聞き逃さなかつた。「なんだ」と思つて両者ともに振り返つた先に見えたのはひらひらした布の下から長い足を見せてゐる。外見から言つたら、見たことも無い少女だつた。金属音と同じくらい不可解な格好に思わず驚いた義就と政長は、久しぶりにたまたま顔をあわせてしまい口論してしまつたのにもかかわらず、顔を見合わせ、少女の下へ一人で恐る恐る寄り添いながら走つた。

「ねえ此処はどこ?」

と先に口を開いたのは少女だつた。

「他でもねえ。ちっぽけな山城の国だ。」

義就は答える。少女は顔を顰めた。しか「知らないなあ」とぼそぼそ言いながら立ち上がつた。

「貴様のその格好は何なんだ?」

政長も少女と同じように顔を顰めた。

「おー怖。答えるのめんどくさいからざつと説明するよ。うん。本当にめんどくさい。あたしはマチコ。7月生まれの〇型ね。この力ツコはね学校に行く為に着てるいわばユニフォームみたいなもんだよつて見た感じ此処は昔だね?御前さんたちが着ているその服一緒だよ。ほら、身分によつてきつときているものが違うでしょ?尤も着てるものは相当高価なものみたいだけど。」

一息ついてハツとマチコは気がついた。血液型の発見はもう少し先だつた(1900、オーストリアのカール・ラントシュタイナーが発見している。)。

「血液型あ?」

と、義就。案の定だ、とミチコは笑つてしまつた。

「いや、つっこむのそこじやねえだろ。まあよい。珍しいお客様みたいだな。城下の細内の言つていた金属音はこれじやないか?」

「ほつ、あそこのおやつさんもたまには本当のことを言つんだな。
「細内い？」

義就が血液型を尋ねたときと同じ形相で反応した。どうやら異世代からの人間はミチコ以外にもいるらしい。ミチコは吃驚してしまつた。それ以上に負けず嫌いの性格から「負けた。先着がいたか」、ということのショックの方が大きかった。

「でも今回のは手ぶらだな。ふふん。帰れなくなつたとか？」

政長は笑いながら座つているミチコを見下して言つた。彼女も負けじと睨み返したがどうにもこうにも勝ち目がなかつた。いわゆる所謂、図星。

「御前さん言つちゃいけないことを言つたね？」

義就が手を差し伸べてくれたのでそれをつたつて立ちながら、冷や汗をかきながらミチコは言つた。相手一人は苦笑していた。「ついてきなよ」と政長が言つたので汚れた尻をはたいて大人しくついて行つた。

「動きこくいんだけど。」

正直に話してしまえば、あの時どの場所に行こうとも全く考えて
いなかつた。てつくり未来へ飛んでつてしまつと思つていていたので尚
更ここに来たのは吃驚だつた。

さて、ミチコ一回は 無論政長と仲の悪い義就は颯爽と消えて
いつた バックにあつたでかい城の一一番上にいた。
「で、君は適当にそのキーとやらを打つたわけだ。」

ミチコは笑つた。

「左様でござります。」

スカートのすそを少しばかり両手で上に上げ、膝を抜きながら軽く
クロスさせた。まるで鹿鳴館で踊つてゐる不慣れな猿みたいだなと
思つた。

「よく分からないな。君の行動は。その格好も分からない。それよ
り聞きたいのは君のその怪しげな服装のことだつたりするわけだ。
女なら普通はつぼ装束か小袖ではないのか？」

「大名様はお察しが悪いのでござりますか？」

ミチコはわざと上目線のふりつとした声で言つてみた。

「たわけ。殺すぞ。」

全くの無意味である。

「あはあは。冗談ですよー。单刀直入にわたし未来、ちよこおーつ
と先の時代から來たんですよー。」

あの声がダメなら、純粹系で。

「気持ちが悪い。」

いつたい何の審査をしているのか。

「つて未来？」

「遅いよ！声より先にそつちに反応しろよ。たわし。
たわしではない。たわけである。」

「たわし！？私は茶色いシャリシャリした物体ではない！いつたい

君はいつ頃から着たのか?」

「うひやひや。あだ名にぴったり。大体1000年後ぐらいかなあ。」

「

たわしの話は本命ではない。

「何処までもムカつく輩だな! 1000年! う大体今が約1450年なんだ。」

盛り上がっていた床が1・4・5・0、といつ数字で一瞬にして静かになった。

「せ、せん・・・、せんよんひやぐじゅうひ。」

本来のミチコには変わりなかつた。所謂、演技ではないといつことだ。それなのに、ミチコの声はしわがれてどこか悲しそうに聞こえてしまう。政長は到底困つた。

「そんな、な・なか・なかんでもいいだりう。」

たわしならぬかみかみのオンパレードである。

「泣いてるわけじゃないんだ。少しどラライアイの症状が進行していくね。」

ミチコは、あえて口調を変えた。

「ふん。君が泣こうが泣かまいが私には関係ないのだが

」

政長の話をさえぎつた。俄然、イライラしてくる。

「いや、彼方には相当の責任がある。なんせ未来からの貴重な迷い子を拾つたんだから。」

とつとう政長はため息をついた。

「じゃあ、噂の細内のといひでも行つてもううか。」

そしてぼそりといった。

何かとミチコにはショックな言葉でしかなかつた。

本音を言つてしまえば、ここにおいてもらえる、といつ確信があつたからである。

「細内?」

「ああ、君には説明がまだだつたかな？まあ行けば分かるさ。案内をするよ。」

ミチコは少しうつむいた。

「その前に少し着替えていってくれ。」

「は？」

「隣の部屋に用意してあると言つていたからな。くれぐれもここで着替えるのは謹んでくれ。」

そういうつて政長は立ち上がり隣の部屋をすーっと開けた。見えたのはつぼ装束が一着、ちよこんと置いてあるだけだった。

「ものすこく動きにくいんだけど。」

すつと政長を睨んだ。

「そうか、とおく遙か彼方の人間には好まれなかつたか。」

クッククッと政長は笑つた。

「つるさいなあ！」

「それでも結構いいものを着せたつもりなんだけど。なーんてね。」

「え？ええ？なあに？昔の人間でもなんちゃつてなんて使うんだ。」
以外と楽しい、とミチコは思つた。ここに来て正解だとも思つた。
もういつそ此処に此の儘居座つてしま

ゞこからミチコ両掛けて小刀が飛んできた。

「いたつ」

「どうした？」
ほほ反射的に地面にしゃがんだ。

「どうした？」

政長も反射的に聞いた。

「どうした、じゃないか。石が飛んできた。痛いな、もつ。
「……すまない。」

「は？」

ミチコは到底驚いた。

「何謝つてんの？」

同時に政長が頭を振る。

「こりいひと理由がある、本当にすまない。細山の家の行きながら話さうか。」

どの時代にもいろいろあんだなー。

わう呑気に思い、ミナコは立ち上がり歩き始めた。

「じゃあなんなんだこれは！－！」

「美琴、来客だ。」

「あん？」

さつぱりした屋敷に限つて、意外と部屋数が多くつたりする。まさにその典型がこここの民宿だつた。昨日まで人が泊つっていた部屋を掃除しながら、美琴は父親の声を聞いた。

「お前のー、友達のー、お偉いさん！」

ああ、

「政長か。」

ため息交じりに声を出した。

あいつが来るときは、ろくな話題もつてこねえからな。

「親父、今行く。」

軋む階段を降り、玄関へ。開かれたドアの先には見慣れない少女と立つている幼馴染が立つっていた。

「久しぶりだな、美琴。」

聞きたくもない声、なぜこんな輩が幼馴染なのか、と思つことは歴。

「ああ、そのガキは？」

「未来からの客だ。」

「またか。残念だが、部屋はいっぱいいた。他をあたつてくれないか？」

そうすると、政長が肩に手をまわして声をひそめ、

「お前にしか頼めないんだ。これならいくらでもある。」

と、親指を人差し指を合せ小さな丸を作つた。

「ほう、聞きたかった金額じゃあ受け付けないぜ。」

そつこつて、両者ともにやけながらミチコをチラ見した。

ミチコは気分が悪かった。

「御前ら、何もかも金で辻付くと思つなよ。」
「思つてはいない。ただおまえのことを考えて
政長のむこうにローキックが入る。」

「ぐおつ」

「じゃあなんなんだよー。」のサインは……」

ミチコも同じように小さな丸を作る。

「なかなかいい足技だねー君、見込みあるよ。」

「うつるそこなーもうー今はこっちの話しじゃんのよー。」

さらに丸を前に突き出し強調する。

「氣荒な女の子は嫌われるよ。全く。とつあえずせ、いじり屋さん
てあげるから。ね、だから落ち着いづ。」

息の荒いミチコに、美琴はそういつた。動きにくい服装でよく動けるもんだ、そう確認した後、ミチコの腕をつかみ強引に中へと押し入れた。

「てんめつー何すんだよー」

「だから、ここにいたいんじょ?」

「別にいたいわけじゃないしー帰れなくなっちゃったのー。」

問答無用、といながら階段の奥へ消えていった。

「じゃあ、すみません椎さん。よろしくお願いします。」

「いや、遠慮する」とないだよ。ここは人を匿つてやるといけ起きにすんなや。」

ほんとにいい家族だな。俺と違つて。

政長はしみじみ思いながら宿を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6679d/>

1442

2010年10月9日05時18分発行